

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM



長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

Contents

- 第15回永井隆平和記念・長崎賞の授与
- カザフスタンからの医師へのヒバクシャ医療研修
- カザフスタンへの専門家派遣
- 韓国医師等の受入研修（第1回、第2回）
- 第26回ながさき国際協力・交流フェスティバルへの出展
- 出前講座の実施

第15回 永井隆平和記念・長崎賞授賞式

The 15th Nagasaki Dr. Nagai Peace Memorial Prize Award Ceremony



第15回永井隆平和記念・長崎賞受賞者を囲む記念写真

第15回永井隆平和記念・長崎賞

カンボジアのチェン・リッティイー博士に授与

NASHIMでは、故 永井隆博士の崇高な平和希求の精神を引き継ぎ、国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を広く顕彰することにより、その継承者を育成し、将来に向けた原爆関連医療の遺産を継承することを目的として、長崎原爆50周年にあたる平成7年に「永井隆平和記念・長崎賞」を制定しました。

この賞は、原子爆弾による被爆、放射線事故等による被曝に関する治療及び調査・研究の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じて世界平和に貢献し、将来にわたり活躍が期待される国内外の個人や団体に授与しています。

15回目となる今回は、カンボジア王国上級大臣〔首相補佐特命相〕のチェン・ケッツ・リッティイー博士に授与することとし、令和7年2月14日（金）にホテルニュー長崎において授賞式を開催しました。



チェン・ケッツ・リッティイー博士

【永井隆（ながい たかし）博士について】

昭和20年（1945年）8月、長崎医科大学（現 長崎大学医学部）で原子爆弾により重症を負いながら、被爆者の救護活動に挺身されました。翌年、同大学の教授となりましたが、白血病で倒れ、病床で「この子を残して」「長崎の鐘」等多くの著作を発表し、祈りと平和を訴え続けられました。

その崇高な平和希求の精神と活動は、今なお、多くの人々に感銘を与えています。

授賞式

授賞式において、森崎正幸 NASHIM会長が受賞者のチェン・リッティイー博士へ賞状楯、賞牌（ブロンズ像）、副賞（賞金100万円）を贈呈しました。

また、永井隆記念館の永井徳三郎館長（永井博士の孫）から花束が贈呈されました。



森崎会長より賞状楯の贈呈



永井館長より花束の贈呈

授賞式の後には、チェン博士の記念講演が行われ、記者会見、祝賀会と続きました。



左からブロンズ像「生命のともしび」、賞状楯、賞金目録



記念講演

【賞状楯（見開き右側）の日本語訳】

第15回永井隆平和記念・長崎賞 チェン・ケッツ・リッティイー 様

あなたは永年にわたり放射線被ばくに係る正しい情報発信を主導するとともに、放射線リスク科学教育における医療人材育成の分野において多大の尽力をされ、その研究と実績を通し、ヒバクシャ医療の向上と世界の平和に大きく貢献されました。

よって、ここに第15回永井隆平和記念・長崎賞を贈りその功績を称え、永く顕彰します。

2025年2月14日 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 会長 森崎 正幸

受賞者の概要及び受賞理由

1. 氏名

Chhem Kieth Rethy (チェン・ケッツ・リッティー)

2. 生年月日・国籍

1952年8月15日生(72歳) カンボジア王国

3. 主な経歴

- 1988–2008年：カナダ・ウェスタン大学・国立シンガポール大学教授
- 2003–2008年：カナダ・ウェスタン大学主任教授(放射線医学)
- 2008–2014年：国際原子力機関(IAEA) ヒューマンヘルス部・部長
- 2010–2021年：長崎大学客員教授
- 2014–2019年：カンボジア王国首席相談役
- 2019–2023年：カンボジア王国首相首席補佐官
- 2023年–現在：カンボジア王国上級大臣〔首相補佐特命相〕

4. 受賞の理由

チェン博士は、カンボジア出身で、フランスのパリ大学医学部で医学を学び、放射線科医として医療の現場に従事されました。その後、カナダのウェスタン大学および国立シンガポール大学で放射線科学講座の教授として学生や医師の育成に努められました。その手腕が評価され、2008年からは国際原子力機関(IAEA) ヒューマンヘルス部長に着任し、医療における放射線の利用についての国際ガイドラインの策定をはじめ、2011年の東京電力福島第一原子力発電所事故(福島第一原発事故)においては、線量評価や住民の健康リスク評価を主導し、原発事故についての正しい情報発信を行いました。

また、教育の面でも、福島第一原発事故前の2010年から、長崎大学の客員教授という立場で教育に参加し、国内外の人材育成に貢献されてきました。福島第一原発事故後には、科学技術社会論(Science, Technology and Society: STS)の概念を放射線リスク科学教育に導入し、科学と社会の橋渡しの重要性を日本の医学界に根付かせる活動を行ってこられました。このSTSの概念は、その後、長崎大学と福島県立医科大学が設立した共同大学院である災害・被ばく医療科学共同専攻の基本的なコンセプトとなっています。

このように、チェン博士が、長年にわたり放射線被曝に係る正しい情報発信を主導され、また、放射線リスク科学教育における医療人材育成の分野においても、多大な貢献をされたことを評価し、今回の受賞となりました。

受賞者より

第15回永井隆平和記念・長崎賞を受賞して



カンボジア王国 上級大臣〔首相補佐特命相〕

チェン・ケッツ・リッティ

平和そして再起する力を称える

永井隆平和記念・長崎賞をお受けできることを大変光栄に思います。福島原発事故の影響を軽減するための私の努力を評価して下さった長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）に心より感謝申し上げます。

永井博士のように、戦争と紛争の時代に放射線学の研究に身を投じた医師および放射線科医として、この瞬間は私の心に深く響きます。放射線学は、かつては破壊のために使われたものが、現在では医療画像診断とがん治療を通じ、人命を救う手段として用いられているように、核科学の二面性を反映しています。核戦争の恐怖を耐え忍んだ永井博士は、この科学を癒しと希望のツールに変え、いかにして慈悲の心で知識を人類に役立てるかを体現なさいました。

永井博士の歩みは私自身の歩みと大変類似しています。共に放射線科医と放射線部長として、永井博士は長崎の原爆投下を通じ、私はカンボジア紛争と大量虐殺を通じて、戦争の永続的な影響に直面しました。私は博士の被った肉体的な苦しみからは逃れましたが、彼の再起力と人類への献身の様は、核技術とそれがもたらす社会的影響に関する世界的な課題に取り組む中で私を鼓舞してくれました。我々の仕事とは、単に病気の診断と治療だけにとどまらず、人類を破壊から癒しへと導くことです。永井博士は、核戦争の惨禍を平和への希求に変え、私たちに将来進むべき方向を示してくださいました。

しかし、平和とは単に争いが無いということではありません。平和とは、科学や倫理、人間の慈悲といった要素が織り交ぜられた複雑な枠組みです。これは日本の神話に美しく描かれており、アマテラス、スサノオ、ツクヨミの物語は、混沌、回復、信頼に関する深い教訓を示しています。これらの神話は、福島原発事故で直面した課題や、原子力エネルギーのより広範な歴史を反映しており、破壊から再生へ至る道程の比喩ともなっています。

神話との類似点を通じIAEAにてSTSアプローチを導入

国際原子力機関（IAEA）に在職中、私は原子力災害のリスクを軽減するには、技術的な専門知識や規制の枠組み以上のものが必要があることを認識しました。より広範で統合的な視点、つまり自然現象と技術的な脆弱性や社会的影響が交差する複合災害の複雑さに対処できる視点が必要でした。この視点

は、同僚やカウンターパートの素晴らしい協力によって拡充、強化されました。貴重な貢献をしてくださった日本の協力者に感謝の意を伝えたいと思います。

福島県立医科大学、広島大学、長崎大学、量子科学技術研究開発機構（旧放射線医学総合研究所）の同僚達は、私たちの共同の取り組みを形作る上で重要な洞察と専門知識を提供してくれました。科学と人類に対する彼らの献身は、悲劇に直面した日本人の再起力と精神を反映しています。また、IAEAの同僚ならびに、科学技術社会論（STS）研究のグローバルチームに対し、深い感謝の意を表します。私たちは共に、多分野に渡るアプローチをグローバル政策に統合することで、原子力エネルギーに関連する複合的なリスクをより深く理解できるよう尽力してきました。多くの関係の方々のお名前を個別に挙げることはできませんが、彼らの献身と貢献は、このパラダイムシフトを前進させる上で重要な役割を果たしてきました。

神話との類似点：三きょうだいからの教訓

1. スサノオと無謀さ：災害における傲慢さの役割

嵐の神であるスサノオは、抑制されない力から生じる無謀さと混乱を体現しています。世界を暗闇に陥れた彼の破壊的な行動は、福島の災害につながった自信過剰と先見性の欠如にも似ています。

IAEAにおいて我々は、STSアプローチを使用し、このような災害は単なる技術的な失敗に起因するものではなく、ガバナンスや文化、またコミュニケーションといった要素が絡む複合的な危機であることを政策立案者に理解してもらえよう支援を行いました。この認識により、技術に対する非難から、体系的な脆弱性に対処するという流れへと再構築がなされました。

2. アマテラスと復興：復興におけるIAEAの役割

太陽の女神であるアマテラスは、光と秩序を象徴しています。スサノオの無謀な行動の後、神々は協力して彼女を洞窟から連れ出し、調和を取り戻しました。同様に、IAEAは統合力として機能し、原子力エネルギーの安全性と信頼を取り戻すための国際協力を促進してきました。

3. ツクヨミと信頼：国民からの信頼の回復

ツクヨミとアマテラスの仲たがいは、福島原発事故後の原子力産業と国民の間の信頼の喪失を反映しています。

信頼は、一度壊れると回復するのは困難です。STSアプローチにより、この亀裂を修復するためには、オープンなコミュニケーションと公衆の関与が必要であることが浮き彫りとなりました。

結びに

神話上のきょうだいであるスサノオ、アマテラス、ツクヨミの相互作用は、原子力エネルギーの複雑さを表す力強い暗喩となっています。無謀さと破壊から復興と信頼に至るといった彼らの物語は、バランスや謙虚さ、そして協力の重要性を強調しています。日本の神話は、すべての物語と同様に、危機から教訓を形作り、そして教えるという文化の永続的な力を明らかにしています。福島の災害は、我々が混

沌を理解し、復興を導き、信頼を再構築する上での助けとなる文化的物語の価値を私たちに思い出させます。

ガリレオはかつて、「夜のように暗い場所にいるときに地球が照らされているのを見ることができれば、月よりも素晴らしいものに見えるだろう」と言いました。間違いなく「夜のように暗い」経験であった福島事故に対する医療専門家の対応は、彼らの揺るぎない人間性で世界を照らしました。最後に、個人的な話を紹介いたします。若い頃、私は植芝の平和哲学に導かれて合気道を修練し、正義と慈悲を体現した揺るぎない正義の盲目の侍、座頭市からインスピレーションを得ました。これらの影響を受けることで、調和と勇気に対する深い尊敬の念が私の中に植え付けられ、私の人生の旅をこれまで導いてきた価値観が形成されました。

カンボジア戦争の難民として、私は紛争と追放の壊滅的な結果を目の当たりにしてきました。2011年に福島の災害が起こったとき、私は被災者との深いつながりを感じ、放射能による混乱と戦争難民の苦しみの間の類似点を認識しました。仏教の縁起の概念、つまり、すべての生き物の相互関係を強調する概念は、困っている人々に奉仕し、福島コミュニティの復興に貢献するという私の決意を駆り立ててきました。

この哲学は、平和と癒しは孤立の中に生まれるのではなく、共通の理解、再起力、そして集団的な努力を通じて生まれることを思い出させてくれます。この賞を、福島原発事故によって生活が大きく損なわれた方々、そしてこの悲劇的な事故の影響を緩和するために自らの命を危険にさらした方々に捧げます。この賞が、科学、倫理、思いやりを結集して人類を守り、尊厳と平和という永続的な価値を育みながら再建と癒しを与えるという私たちの共通の責任を思い出させるものとなりますよう願います。



【NASHIM事務局から】

チェン博士は、授賞式翌日、カンボジアから同行した関係者と共に、長崎原爆資料館、長崎市永井隆記念館などを視察しました。NASHIMの山下理事（福島医科大学副学長）、高村教授も同行しました。



森崎会長より賞牌〔ブロンズ像〕の贈呈



受賞者とその関係者のみなさん
〔中央後部左側は山下理事、右側は高村教授〕



長崎原爆資料館



原爆落下中心地碑



平和公園



永井隆記念館

ブロンズ像「生命のともしび」について

歴代の永井賞受賞者に賞牌として贈呈



1995年3月製作
高さ34cm（台座を除く）

NASHIMでは、「永井隆平和記念・長崎賞」の制定以来、「生命（いのち）のともしび」を第1回から今回に至るまで、歴代の受賞者に賞状楯とともに贈呈してまいりました。

“ともしび”は人間の命にたとえられることがよくありますが、この像の製作者であります長崎大学教育学部の故佐藤敬助教授は、その揺らめく“ともしび”を少女の命とみなし、少女の像をとおして人間の命に対する慈しみや命の大切さを表現しています。

【製作者 佐藤敬助(さとうけいすけ) 教授のプロフィール】
1951年10月24日～2017年12月5日

〈職歴〉

| | | |
|---------|----------|----------|
| 1980年5月 | 長崎大学教育学部 | 講師 |
| 1984年4月 | // | 助教授 |
| 1996年4月 | // | 教授（彫刻担当） |
| 2017年3月 | // | 定年退職 |
| 2017年5月 | // | 名誉教授 |

〈活動実績〉

日展（日展会員）
日彫展（日本彫刻会会員）
五月会展
長崎県選抜作家美術展（運営委員・選抜作家選考委員）
長崎県美術協会展（長崎県美術協会副会長）
長崎県展（長崎県展実行委員・審査員）
爽創会展等に出品

カザフスタンからの医師へのヒバクシャ医療研修

NASHIMでは、平成5年（1993年）からロシア、ウクライナ、ベラルーシなどチョルノービリ原発事故周辺諸国や旧ソ連の核実験場があったカザフスタンで放射線被曝者の治療にあたる医療従事者に対する指導、技術援助や医療情報提供を行うため、関係機関の協力を得て、独自に医師等の研修生を受け入れています。

新型コロナウイルス感染症の影響などもあり、令和元年（2019年）を最後に、受入研修を中断していましたが、昨年度4年ぶりに受け入れを再開しました。

今回はカザフスタンから5名の医師を招き、ヒバクシャ医療研修を行いました。研修生は令和6年（2024年）7月9日から8月11日まで長崎に滞在し、長崎大学や長崎大学病院を中心とした専門研修において、日本の最新医療を学び、ヒバクシャ医療分野の関係者と交流を深めました。

また、研修期間中には長崎原爆資料館や追悼平和祈念館の見学、被爆体験講話の聴講など、長崎原爆の実相について学び、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センターなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護ケアについても理解を深めました。



長崎県知事への表敬訪問

【研修生名簿】

- | | | |
|------------------|----------|--|
| 1. サトヴァルディナ・ナゼルケ | (カザフスタン) | ナザルバエフ大学付属「ナショナルラボ・アスタナ」生命科学センター ゲノム・個別化医療研究所准研究員 |
| 2. アリーポフ・アジザ | (カザフスタン) | カザフスタン国立医科大学 内分泌内科・准教授 |
| 3. サルセーノフ・ラザット | (カザフスタン) | アルファラビ・カザフ国立大学医学部基礎医学科 講座長・准教授 |
| 4. エレウバーエフ・ジャーナル | (カザフスタン) | カザフスタンがん・放射線研究所 形態学研究センター 研究員（細胞病理学） |
| 5. ドゥシーモフ・ザウレ | (カザフスタン) | アルファラビ・カザフ国立大学医学部 基礎医学科准教授・研究国際協力副部長 |

【日程概要】

- 7/9 長崎へ到着
- 7/10～25 関係先訪問・見学、長崎大学での共通研修
- 7/26～8/8 長崎大学・長崎大学病院等での専門研修
- 8/9 平和祈念式典参列
- 8/11 帰国のため長崎出発



長崎原爆資料館



被爆体験講話

研修後の感想



Satvaldina Nazerke (サトヴァルディナ・ナゼルケ)

ナザルバエフ大学附属「ナショナルラボ・アスタナ」生命科学センター
ゲノム・個別化医療研究所准研究員

2024年7月10日から8月1日までの間、私は長崎・ヒバクシャ医療国際協力会NASHIMの招待のおかげで、長崎大学原爆後障害医療研究所と長崎大学病院にて研修を受けることが出来ました。公式訪問、講義、病院や研究室での実習など、非常に濃厚な研修プログラムでした。表敬訪問には、長崎県知事、長崎市長、長崎大学学長、長崎大学病院長、長崎大学医学部長への挨拶ができましたし、長崎県医師会にも挨拶に伺いました。

私たち研修員は、放射線が人間の健康に及ぼす影響の分野で科学的研究を実施し、長崎の原爆被害者への医療を提供している放影研、原対協、日本赤十字病院などの団体を訪問しました。さらに、私たちは長崎原爆資料館を訪れ、起きた悲劇の当時の実情に触れる事が出来ました。

長崎大学の各分野の専門家である教授方々による興味深い講義を受けることが出来ました。講義には、広島と長崎の原爆投下、チョルノービリと福島原子力発電所事故の研究から得られた比較分析結果と貴重な経験が含まれていました。講師、教授の皆様（Dr. Noboru Takamura, Dr. Masahiro Nakashima, Dr. Shunichi Yamashita, Dr. Takashi Kudo, Dr. Norisato Mitsutake, Dr. Vladimir Saenko, Dr. Keiji Suzuki, Dr. Naomi Hayashida, Dr. Yasushi Miyazaki, Dr. Sumi Yokoyama, Dr. Kohichiro Yoshiura, Dr. Ryoichi Mori, Dr. Tao-Sheng Li, Dr. Yoshisada Shibata）に感謝の意を表し

ます。

日本の科学者、医師、専門家は、原爆投下の影響、被爆者の健康への放射線の影響、放射線防護、またヒバクシャと社会のコミュニケーション作りに対する、大変な苦勞を伴う多大な研究がなされた事が分かりました。

私の研修の後半は、放射線分子疫学部の研究室での実習に専念しました。実験室にて、甲状腺がんおよび結腸がんの腫瘍組織切片の免疫組織化学的検査（IHC）、ddPCR検査、ddPCR検査結果のデータ分析とその研究技術を学ぶ機会がありました。研修の実習では、知識と経験を共有してくれたウラジミール・サエンコ博士とタチアナ・ログノビッチ博士に感謝の意を表します。

さらに、長崎大学病院ゲノム医療センターを拝見し、臨床腫瘍学研究室でのがん診断のプロセスについて学びました。Dr. Bungo Furusato と Dr. Emiko Udo、貴重なお時間を割いていただきありがとうございました。この研究室では、がんゲノムプロファイリングおよび配列決定手法にはどのようなパネルが使用されているかを見るのは興味深いことでした。

この研修に参加できる機会を与えてくださった長崎・ヒバクシャ医療国際協力会NASHIMに感謝の意を表したいと思います。また、日本滞在中に色々とサポートしていただいたNASHIMの山崎様と通訳のイリナ様にも感謝の意を表します。



Alipova Aziza (アリーポワ・アジザ)

カザフスタン国立医科大学
内分泌内科・准教授

2024年7月10日から8月9日までの間、私は日本の長崎市にて長崎・ヒバクシャ医療国際協力会NASHIM主催の研修を受けました。

研修の主な目的は、放射線被ばくの被害者に医療を提供するための知識と技術を習得することでした。研修の初めに、長崎県知事、長崎市長、長崎大学学長、長崎大学病院院長、長崎大学医学部長、日本赤十字病院院長、長崎県医師会への訪問挨拶が行われ、科学の発展と放射線被ばく被害者への医療に関する時事問題が議論されました。また、長崎大学病院や日本赤十字病院の医療体制や組織についても説明してもらいました。長崎原爆資料館と追悼平和祈念館を訪問・見学し、そして1945年8月9日の原爆投下でヒバクシャになった方と面会しました。

研修の第2部は、医学部の原爆後障害医療研究所にて行われました。私たちは、病理学、放射線医学、血液学、疫学、幹細胞、放射線分子生物学、放射線と甲状腺がんについて講義を受けましたし、チョルノービリと福島の実験に基づく甲状腺への放射線被ばくの影響に関する講義も受けました。放射線影響の分野における最新の科学研究の成果を教えてくださいました。

研修の第3部は、長崎大学病院の内分泌内科、代謝内科、第一内科（アイソトープ治療）、小児科、内分泌外科にて行われました。特に興味をひいたのは、内分泌科と小児科の業務体制でした。内分泌病理を伴う複雑な患者の診断と治療の問題を議論する臨床カンファレンスに参加し、遺伝性疾患や小児疾患に関する講義を聞きまし、入院患者の回診にも参加しました。甲状腺とリンパ節の細針吸引生検を実行する技術に精通しました。長崎大学病院は20室の手術室を備えています。ニューロナビゲー

ションを使用した甲状腺の手術と、手術支援ロボット「ダヴィンチ」を使用した手術を観察しました。経験豊富な医師は最新の顕微手術技術を使用するおかげで、手術による身体への負担を軽減する事ができます。研修の終了時に、参加者全員に国際証明書が与えられました。

研修の最終日には、79年前の1945年8月9日の原爆投下を追悼する「慰霊平和祈念式典」に参加しました。

最後に伝えたいのは、私はおかげさまでたくさんの新しい、興味深いことを学び、有益な情報を取得し、忘れられない思い出ができました。

研修に参加する機会を与えてくださった長崎・ヒバクシャ医療国際協力会NASHIMに深く感謝いたします。温かい歓迎は、研修、街、そして人々の最も優しい印象を与えてくれました。質の高い研修を企画していただき、本当にありがとうございました！ 空港でのお出迎えから最終日まで、私たちの快適さへの絶え間ない気遣い、詳細な研修プログラムの作成、絶え間ないサポート、質問があれば喜んで説明してくれたこと、すべてが私たちの心の底まで感動を与えました！

ありがとうございました!!!



Sarsenova Lazzat (サルセーノワ・ラザット)

アルファラビ・カザフ国立大学医学部基礎医学科
講座長・准教授

2024年7月9日から8月11日までの間、私は長崎大学原爆後障害医療研究所にて「核医学」の研修を受ける機会に恵まれました。

この研修は、放射線にさらされた人々への医療支援に関する知識と経験、および放射線の人体への影響に関する現代科学の成果を交換するために長崎・ヒバクシャ医療国際協力会NASHIMによって企画されました。

最初の2週間の研修は、広島と長崎への原爆投下の医学的影響と、全日本国民と、特に日本の科学者と医師がヒバクシャの健康を守り続けるための資料を元に講義を受けました。私たちは、原爆投下が人間の健康に及ぼす影響に関する約60年にわたる研究の結果と、ヒバクシャとその家族への医療支援を組織する上の前例のない経験を紹介されました。

私たちは、データの収集、保管、研究、そして被爆者とその家族の健康状態の生涯監視に携わる日本赤十字病院、放影研、原対協・長崎市健康管理センターを訪問・見学しました。私たちは、これらの研究から開発された証拠に基づくアプローチが、チヨルノービリと福島の影響を軽減または防止するのにどのように役立ったかについて、貴重な経験と洞察を得ることができました。

長崎原爆資料館と追悼平和祈念館の訪問・見学、そして1945年の原爆投下のヒバクシャとの面会は、この研修の非常に重要な部分となり、忘れられない印象を残しました。私の意見では、この研修は、長崎の科学界と医学界に代表される日本国民が引き受けた重要な使命、つまり原爆投下による悲劇の繰り返しを防ぐという重要な使命を实践するものであると思います。そして日本の科学者はこの使命を世界中で担い、経験と知識を共有しています。

私は、セミパラチンスク核実験場での核実験の影響を研究する上で、我が国に対する長年の協力と無

私な支援をしてくださった長崎大学原爆後障害医療研究所の同僚達に感謝しています。

この一連の講義により、人間の健康に対する放射線の影響に関するあらゆる側面に関する長崎大学の科学者の方々の最も重要な研究結果を知ることができました。それは、放射線生物学、疫学と生物統計、放射線防護、医療における核医学技術、遺伝子研究、幹細胞研究、トランスレーショナルリサーチ、無生物や人体からの放射線を検出する方法、放射線誘発がんの病態形態学的徴候など。長崎大学原爆後障害医療研究所の職員らが科学プロジェクトの成果を共有し、これからの共同研究の可能性についても話し合いました。

研修の後半では、原爆後障害医療研究所で実習を行うはずでしたが、私の健康上の理由により、この段階で勉強を中断しなければなりませんでしたが、しかし、そのおかげで長崎市の医療体制を患者として体験することができました。この体験により、私は長崎大学の関係者、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会NASHIM、入院先の医療スタッフや医師の方々の細心の配慮と私の健康への責任感に対し感謝していますし、そして精神的・経済的の支援に対して感謝と敬意の気持ちを抱きました。

研修プログラムには、表敬訪問が含まれていました。表敬訪問には、長崎県知事、長崎市長、長崎大学学長、長崎大学病院長、長崎大学医学部長への挨拶ができましたし、長崎県医師会にも挨拶に伺いました。

これは、長崎市に対する私たちの研修の重要性を示しており、またはNASHIM研修の卒業生としての相互責任感を呼び起こします。私たちが取得した情報、経験、アイデア、使命をカザフスタンの同僚や学生と共有するのは、これからは私たちの責任です。

また、この研修のおかげで、日本の文化に触れ、多くの素晴らしい人々に出会い、長崎近郊の歴史文化名所を訪問し、日本のおもてなしと責任感を体験する機会を得ることができ、これは貴重な個人的な経験です。

最後に、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会NASHIM、長崎県医師会会長、原爆後障害医療研究所の中島正洋所長、ジャンナ・ムサザノワ博士、原爆後障害医療研究所のスタッフ一同に感謝を致します。また、研修中の日本での快適な滞在のサポートをしてくれたNASHIMの山崎様、そして高品質の通訳と優れた人間性、私たちの余暇の時でも手伝ってくれた高矢イリナ様に感謝します。済生会病院の医療スタッフ一同、医師のYasushi Mochizuki先生とMisato Morimoto先生に、私の健康を気にかけていただき誠にありがとうございます。



Yeleubayeva Zhanar (エレウバーエワ・ジャーナル)

カザフスタンがん・放射線研究所 形態学研究センター
研究員 (細胞病理学)

2024年7月9日から8月11日までの間、カザフスタンの医療専門家らは、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会NASHIM主催で、長崎大学原爆後障害医療研究所にて研修を受けました。

重要なポイントと結論を含む研修の報告を致します。

研修目的：

- 放射線医学についての知識深め。

- 原子力災害の被災者への医療支援における経験交換。
- 放射線による健康への影響に関する科学的研究結果の講義。
- 病態形態学、細胞学、分子遺伝学の方法の実習。

講義内容（7月9日から7月26日）

- 長崎への原爆投下の影響。
- 被災者への医療支援の仕組。
- 腫瘍性疾患と放射線生物学。
- 放射線防護、核医療。
- 病理診断科、遺伝カウンセリング部、腫瘍科など見学。
- 核酸を単離し、PCR結果を解釈する方法の勉強。

研修の実習では、大学病院の病理診断科（病態形態学）、遺伝カウンセリング部、腫瘍科胸部外科、内分泌科、原爆後障害医療研究所を見学し、業務内容を見ました。私は、乳がんおよび甲状腺がんの200枚以上のアーカイブされた組織スライドおよび細胞スライドを閲覧してレビューしました。山口倫教授とジャンナ博士は、甲状腺と乳腺の病理における組織病理診断、免疫蛍光診断、免疫組織化学診断の経験を共有しました。

大学病院の病理診断科にて、私は診断組織病理学プロセスの構成、サンプルの準備と分析に精通しました。

大学病院の診療科では、スタッフが患者の治療経験を共有し、私はニューロナビゲーションを使用した甲状腺摘出手術および肺がんの手術支援ロボット「ダヴィンチ」を使用した手術に立ち会いました。

研修員は手術を視察し、日本赤十字病院などの医療機関の代表者らと面談しました。その他は

- 長崎県知事、長崎市長の表敬訪問。
- 長崎原爆資料館と追悼平和祈念館の訪問。

8月9日の慰霊平和祈念式典の参加は、研修員にとって大変光栄なことでした。

研修中、私は関係者一同のフレンドリーで思いやりのある態度、そして毎日便利な移動ルートを作成し、常に責任を持って問題を解決してくれたNASHIMの山崎様の思いやりに素晴らしい印象を受けました。特に通訳者の高矢イリナ様の仕事に敬意を表し、彼女の高いプロ意識と私たちに対する前向きな姿勢に感謝したいと思います。

この研修企画に携わった関係者の皆様、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会NASHIM、長崎県医師会、原爆後障害医療研究所の中島正洋所長、ジャンナ博士へ、研修推進にご尽力いただきましたこと、心より感謝申し上げます。



DUSHIMOVA ZAURE (ドゥシーモワ・ザウレ)

アルファラビ・カザフ国立大学医学部 基礎医学科

准教授・研究国際協力副部長

2024年7月9日から8月11日までの間、カザフスタンの医療専門家らは長崎大学原爆後障害医療研究所にて研修を受けました。この研修は、カザフスタンの医療専門家らの放射線医学に関する知識を深め、原爆投下やチェルノブイリと福島原子力発電所での被災者への医療ケアの経験交換、放射線が人体に及ぼす影響を研究する科学的な研究また、病態形態学、細胞学、分子遺伝学的な研究法、免疫組織化学の研修を実施する目的として、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会NASHIMにて企画されました。

研修は講義と実習の2部構成となっていました。7月9日から7月26日までの間、長崎への原爆投下の影響、ヒバクシャへのケア、チェルノブイリと福島の災害後のさまざまな病態を伴う疾患の研究、人体全体および個々の臓器に対する放射線の影響（甲状腺の腫瘍性疾患、血液疾患）についての講義が行われました。講義内容は、放射線生物学、疫学と生物統計、放射線防護、医療における原子力技術の利用、遺伝子研究、幹細胞の研究、トランスレーショナルリサーチ、無生物や人体からの放射線を検出する方法、放射線誘発がんの病態学的徴候などに関する研究結果でした。長崎大学原爆後障害医療研究所の職員らと科学プロジェクトの成果を共有し、これからの共同研究の可能性についても話し合いました。

実習では、私たち研修員は大学病院および長崎大学原爆後障害医療研究所にて病理（病態形態）、遺伝学、腫瘍科、胸部外科、内分泌科、小児科の業務を視察し実習もできました。また、ヒト組織サンプルから核酸を単離する方法、デジタル液滴PCR (ddPCR) の実行と結果の解釈方法、乳がんおよび甲状腺がんの細胞診方法、組織診断方法、および免疫蛍光法も研究しました。

長崎大学病院の病理部を訪問した際、私たちは組織診断、サンプルの作成と分析プロセスの仕組みを研修しました。病院の医師らは患者の治療経験を共有し、研修員はニューロナビゲーションによる甲状腺切除術、肺がんの疑いに対する手術支援ロボット「ダヴィンチ」による肺手術などの手術を見学しました。

また、研修中には、日本赤十字病院、放影研、原対協・長崎市健康管理センターを訪問し見学しました。長崎訪問の一環として、長崎県知事、長崎市長、長崎県医師会長でもあるNASHIM会長、長崎大学医学部長、長崎大学病院院長を表敬訪問・会談を行いました。

特に印象に残ったのは、長崎原爆資料館と追悼平和祈念館への訪問でした。1945年の原爆投下で生き残ったヒバクシャと面会したとき、私たちは大きな興奮と温かさを感じながら、悲劇の実状の恐ろしい詳細を知りました。8月9日の慰霊平和祈念式典に参加できたことは、カザフスタンからの研修員にとって大変光栄なことでした。

最後に、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会NASHIM、長崎県医師会、原爆後障害医療研究所の中島正洋所長、ジャンナ・ムサザノワ博士、原爆後障害医療研究所の職員皆様に感謝を致します。そして、研修中に常に支えて下さったNASHIMの山崎様、通訳の高矢イリナ様の高いプロ意識とカザフスタンからの研修員への気遣いに感謝を致します。

カザフスタンへの専門家派遣

診療茶話

No. 538

NASHIMの専門家派遣事業（カザフスタン訪問）報告

日本赤十字社長崎原爆病院 院長 谷口 英樹

長崎県医師会の皆様、日頃より大変お世話になっております。

さて、今回より1年間日本赤十字社長崎原爆病院が診療茶話を担当させていただくことになりました。各回当院の精鋭が登場致しますのでご期待ください。

今回は初回でもあり院長の私が担当させていただきます。

先日、長崎・ヒバクシャ医療国際協会（Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care=以下NASHIM）の派遣事業でカザフスタンに行っておりましました。NASHIMの会長は県医師会の森崎会長であり、今回はその御名代として参加させていただいたこととなります。

NASHIMについてはご存じの先生方が多いと思いますが、念のため簡単に説明させていただきます。NASHIMは在外被爆者や世界各地の放射線被災者の救済を目的に設立されております。

その構成は長崎県医師会、長崎市医師会、長崎大学（医学部、原研など諸施設含む）、日本赤十字社長崎原爆病院、放射線影響研究所、長崎原子爆弾被爆者対策協議会、長崎平和推進協会、長崎県、長崎市で、当院は院長が理事を、副院長が運営委員を務めます。

その主な事業概要は

- ① 医師等受け入れ研修事業
- ② 専門家派遣事業
- ③ 講演会開催等普及啓発事業
- ④ 医学教科書等の出版事業
- ⑤ 永井隆平和記念・長崎賞で④⑤は隔年で行われます。

今回は②の専門家派遣事業に参加させていただいたこととなります。

今回の派遣団は私のほか長崎大学原研の中島、

光武両教授と通訳兼コーディネーターの高橋さん、NASHIM事務局の山崎さんの5名で構成されました。中島、光武両教授とは旧知の仲でありスムーズに意思疎通ができ、事務局の方や通訳の方も極めて友好的かつ有能で大変いい出張となりました。日程は5泊6日（うち最終日は機内泊）でアルマティに2泊、セメイに2泊の行程でした。1日目は移動日で長崎駅前を午前11時に出発し、福岡空港からソウル・インチョン空港経由でアルマティに現地時間22時くらいに到着。（時差は4時間）2日目午後から公式日程が組まれました。

2日目のメイン事業はアルファラビ・カザフスタン国立大学訪問で、医学生や教官対象のセミナーを開催。私も日本赤十字社長崎原爆病院について紹介を行いました。現地受講のみならずWebでも多数の聴講があり、NASHIM事業に対する期待度がよくわかりました。

学術的な講演は中島教授が甲状腺腫瘍の悪性度に関する講演、光武教授が甲状腺がんの生物学的特徴に関する講演が行われ、かなりレベルの高い講演でしたが、様々な質問も飛び交い関心の高さがうかがわれました。



写真① 中島、光武両教授とNASHIM事務局の山崎さんとともにアルマティ市内を望む

今回のカザフスタンへの専門家派遣は、NASHIM理事である日本赤十字社長崎原爆病院の谷口英樹院長を団長とし、長崎大学原爆後障害医療研究所の中島正洋教授、光武範史教授ほか2名の計5名で、令和6年8月26日から31日にかけて実施しました。その内容について、谷口院長が『長崎県医師会報第945号（令和6年10月）』に寄稿されましたので、谷口院長と県医師会のご了解をいただき転載しております。

診療茶話
No.538



写真② アルファラビ・カザフスタン国立大学での講演風景

セミナー終了後アルマティ在住のNASHIM研修生との夕食会が開催されました。メンバーの中にはNASHIM事業で当院を訪れたことのある方も含まれ、私自身は留学経験もなく、片言の英語によるコミュニケーションでしたが和やかな時間を過ごすことができました。

3日目はセメイに移動し、メインの活動として8月29日の核実験に反対する国際デーに行なわれた式典で現地の知事、市長、セメイ医科大学学長らとともに記念のモニュメントに献花してまいりました。

ご存じの通りカザフスタンのセミパラチンスク核実験場においては、旧ソ連時代に450回を越

える核実験が行われ、多くの被害をもたらし、今日でも一説によれば100万人を越える被害者がいるとされます。原子爆弾の被害を受けた長崎の知見は現地にとって極めて重要な意味を持ち、カザフスタンにおけるNASHIMの意義もまさにここにあると良いと思います。

3日目の夜は現地アバイ州医師会との夕食会が開催されました。

実はこれが訪問団長にとっては鬼門で（笑）、かつて何回も訪問団が乾杯攻めにあい、轟沈した記録があります。この情報は通訳兼インストラクターの高橋さんから重々聞いておりましたので、自称長崎を代表する酒飲みの私としても油断なく構えておりました。夕食会は極めて歓迎的であり、牛や豚はもとより鶏、羊、馬といった現地ならではの肉料理が所狭しと並べられ、魚は1mもあろうかというチョウザメの1本焼きが存在感を示しておりました。予想通り乾杯攻めにもあいましたが極めて友好的で適切に（？）飲み、気持ちよく過ごすことができました。

4日目はセメイ医科大学を訪問しアルマティと同様のセミナーを開催しました。現地参加者は50名超、Web聴講者も100名を超えており、ここでも関心の高さがうかがわれました。

セメイ医科大学には長崎大学原研の山下、関根、高村教授らの写真や書物などが展示してあり、改めて両大学間の関係性の深さを感じました。



写真③ 核兵器禁止モニュメントへの献花



写真④ アバイ州医師会との懇親会の一コマ

公式行事後はセメイ在住のNASHIM 研修生との夕食会が開催され、ここは構えることなく健全に友好を深めました。アルマティ、セメイともにNASHIM の研修で長崎を訪れたことのある研修生は非常に優秀で、ほとんどの方が現地の教授、准教授、部長などに任じられており、長崎に派遣される方々のレベルの高さに驚くとともに、こちらもよく勉強して質の高い学术交流を続けなくてはならないと痛感致しました。

最終日は移動日でしたがアバイ州医師会の皆様に空港送迎を含む親身のお世話を頂き、医師会長自ら見送りにも来ていただいて感激いたしました。会長はNASHIM の意義を強調され、今後も両国

の友好と学術的交流が継続するように強く希望されており、当方も同様の想いをお伝えしました。

今回の訪問を通じ、全体的に非常に友好的で質の高い交流ができたと感じております。

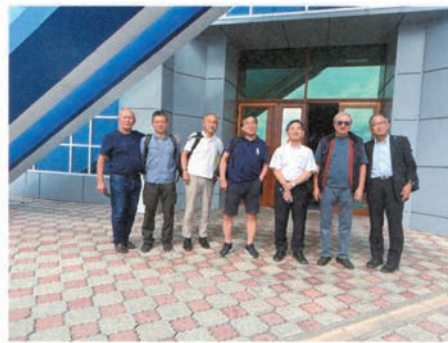
私自身NASHIM の運営委員を9年勤めたのち現在理事5年目で、その事業内容に関しては十分承知していたつもりでしたが、実際にカザフスタンに赴き事業の成果の質の高さと、現地の期待を目の当たりにし、認識を新たにいたしました。

今後ともこの事業が継続し、両国の友好関係が続くように切に希望いたします。

以上1年間の診療茶話担当の開始に当たりご報告致しました。今後とも宜しくお願い致します。



写真⑤ セメイ医科大学での講演風景



写真⑥ 帰国直前セメイ空港でアバイ州医師会長らとともに

+++++

【NASHIM事務局から】

NASHIM研修生OBとの意見交換会を、アルマティで5名、セメイで8名の参加を得て開催しました。皆さん、国・大学等の要職や病院経営者(翌日病院視察)です。研修生OBからは、甲状腺を触診で行っていましたが超音波検査機器をいただいたこと、患者への接し方も勉強した心のこもったプログラムだったことへの感謝や毎日カザフスタンの母にメールしたものを保存している話など聞かせていただきました。中島教授からはひとを育てるために継続することの重要性、レベルアップを図るためには研究の質を担保する人材、インフラの整備とマテリアル(対象、資料や試料)の充実が必要で、この事業が形式的なものではなく、真に現地の医療のレベルアップに資するものになるよう留意が必要との話がありました。



韓国医師等の受入研修（第1回、第2回）

韓国に居住している被爆者への医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わっている韓国の医師等を招いた受入研修を実施しています。

第1回は10名の医師・看護師等が参加し、令和6年（2024年）10月6日から10日まで、第2回は10名の医師・看護師が参加し、令和7年（2025年）1月19日から23日までの日程で行われ、長崎大学や日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所で、ヒバクシャ医療に関する知識の取得や情報交換を行うとともに、被爆者からの講話を聞いたり、長崎原爆資料館などを訪れ、長崎原爆の実相について学びました。

なお、第2回研修では、長崎県が実施する在外被爆者支援事業の一環として招聘したブラジル人医師2名（ガブリエル・クシャマ・テイシェイラ先生、ダニエル・ケンジ・フクハラ先生）も合同で受講しました。

第1回 韓国医師等受入研修

（令和6年10月6日～10日）

【日程概要】

- 10/6 長崎へ到着
- 10/7～9 関係先訪問・見学、長崎大学での講義
- 10/10 長崎より帰国

【研修生名簿】

- | | | |
|-------------------|------------|-----|
| 1. 劉 吉鍾（ユ・ギルジョン） | ソウル赤十字病院 | 医 師 |
| 2. 鄭 熙穆（チョン・フィモク） | 尚州赤十字病院 | 看護師 |
| 3. 姜 旭（カン・ウク） | 居昌赤十字病院 | 医 師 |
| 4. 李 愨智（イ・ミンジ） | 統営赤十字病院 | 看護師 |
| 5. 鄭 末禮（チョン・マルイェ） | 慶熙医療院 | 看護師 |
| 6. 房 禮原（パン・イエウォン） | 京畿道医療院水原病院 | 医 師 |
| 7. 鄭 素娟（チョン・ソヨン） | 韓国原子力医学院 | 行政職 |
| 8. 宋 周妍（ソン・ジュヨン） | 東南圏原子力医学院 | 医 師 |
| 9. 廉 釋蘭（ヨム・ソクラン） | 釜山大学病院 | 医 師 |
| 10. 洪 銀石（ホン・ウンソク） | 蔚山大学病院 | 医 師 |



日赤長崎原爆病院視察



被爆体験講話

第2回 韓国医師等受入研修

(令和7年1月19日～23日)

【日程概要】

- 1/19 長崎へ到着
- 1/20～22 関係先訪問・見学、長崎大学での講義
- 1/23 長崎より帰国

【研修生名簿】

| | | |
|----------------------|----------------|-----|
| 1. 朴 智叡 (パク・ジイェ) | ソウル赤十字病院 | 医 師 |
| 2. 金 ナラ (キム・ナラ) | 尚州赤十字病院 | 看護師 |
| 3. 金 孝政 (キム・ヒョジョン) | 居昌赤十字病院 | 看護師 |
| 4. 曹 胤榮 (チョ・ユンヨン) | 嶺南大学医療院 | 医 師 |
| 5. 鄭 秀眞 (チョン・スジン) | 釜山報勲病院 | 看護師 |
| 6. 楊 徳淑 (ヤン・ドクスク) | ユウォン医療財団陝川療養病院 | 看護師 |
| 7. 朴 正鎬 (パク・シヨンホ) | ソウル大学病院 | 医 師 |
| 8. 鄭 秀榮 (チョン・スヨン) | 東南圏原子力医学院 | 医 師 |
| 9. 崔 炳旭 (チェ・ビョンウク) | 大邱カトリック大学病院 | 医 師 |
| 10. 黃 正性 (ホァン・ジョンソン) | 蔚山大学病院 | 医 師 |



平和公園



ホールボディカウンター

研修後の感想

【第1回】

- よく構成されているが、見学と学習を少し調整すれば良いかと思います。重複する内容が少しあります。きれいな都市で快適に過ごせて帰ります。
- NASHIMの招請研修に参加して、少数人員だが、原爆、被爆、放射能などの接しにくい分野の講義及び体験ができて特別な機会となりました。

講義ごとに研究所の教授の情熱及び研究に対する誠実さを感じ、講義後の質疑応答をする姿を見て、韓国の医療スタッフ及びキラムス先生も水準の高い医療専門知識を有しているという感じがしました。私は、赤十字病院の看護師として専門的な医学知識も良かったが、長崎赤十字病院を訪問して実務を行う姿、医療体系を間接的だが目で見ることで良い体験で意義深かったです。

韓国にある私の仕事場に戻って、日本赤十字病院で撮った写真、映像を同僚らと共有したいです。

海外の医療機関の訪問と交流は、着実に継続してほしいです。

- 丁寧なおもてなしに対して、とても感謝します。私にはこれ以上の機会はないと思いますが、今後このような韓日間の交流がより一層活発になり、両国がお互いを理解する機会になればと思います。
- まず、研修に招請していただき、ありがとうございました。私が生まれる前のことなので、原爆についてよく分からなかったが、これをきっかけに勉強もして、よくわかるようになりました。原爆がどれほど恐ろしいものか、今後こうしたことは絶対になくさなければなりません。そして韓国に戻って、私たち病院に原爆被害者が診療を受けに来られたら、診療だけでなく、その心の傷までも看護できる看護師になります。今後もこのような研修が多くあればいいと思います。
- 原爆は、韓国や日常から関係が遠いと思っていたが、一緒に来たチーム員を通して韓国とも密接に関係があるということが分かった。原子力発電所の危険もまた深刻で、安全に管理しなければならないということを感じた。研修期間を通して、原爆の危険性と威力、苦痛を受けて生きてきた人々に対して、多くのことを考えるようになり、被害者らを管理して研究を持続的に行っている日本と支援しているアメリカに対して感謝したい。研修のために準備して進められたNASHIMのすべての方の誠意と努力が感じられ、すべての方々に感謝します。

【第2回】

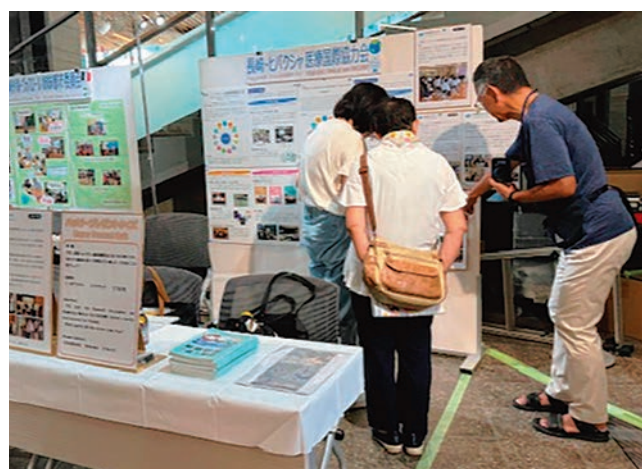
- 原爆病院の院長と長崎大学病院の教授の熱情的な講義のおかげで、多くのことを学べ、特に原爆病院の院長自身も被爆者の二世だとおっしゃったとき、そして病院で直接患者を診て一生をこのテーマについて研究する教授の真正性が講義で深く感じられました。今回の研修で得た知識と心のこもった情熱を心に刻んで帰ります。
- 今回の原爆被害者の海外研修を通して、歴史的事件の深刻さを悟り、平和の重要性について、もう一度考えるきっかけとなりました。当時の戦争が残した傷と変化した人生など……どれだけ大きな影響を及ぼしたのか、感じるものが大きいです。平和な未来のための私たちの役割についても考えることになる時間だったと思います。戦争の残酷さを忘れないための重要な経験、機会でした。このような機会を私にくださり深く感謝申し上げ、4泊5日という時間の間、永遠に残る大切な時間を過ごすことができ、時間が短く感じられたりもして残念でもあり、もっといたいと思いました。海外研修者のために努力して下さったすべての方々に感謝申し上げます。
- 非常に教育的なプログラムです。特にRERF（放射線影響研究所）の教育機関におけるレッスンが。
- NASHIMの招待研修の日程に参加できて良い経験をすることができました。原爆の被害の実状を原爆病院の見学、長崎大学の原爆後障害医療研究所で熱情的な教授の講義を通して知ることができました。またNASHIMと日本政府でも最後まで原爆被害者の方々に対して治療と研究をしていることに感動を受けました。4泊5日間、通訳の先生だけでなく関係者の方々に気遣っていただき、ご配慮いただいたおかげで、安心して日程を過ごすことができたことを深く感謝申し上げます。原爆の犠牲者がこれ以上発生しないことを心の中で深く感じながら、もう一度、犠牲者の方々に追悼の意を表します。
- 全般的によく構成されたプログラムで良い教育を受けることができ、良かったです。普段余り知らなかった放射線の被曝過程と被曝後の障害の影響について、更によく知ることができる機会となり、今回の研修の内容を基に元々韓国で行っていた放射線の非常診療訓練を更に上手くできるようにします。

第26回ながさき国際協力・交流フェスティバル

令和6年9月15日に長崎県庁で開催された「ながさき国際協力・交流フェスティバル」に出展しました。NASHIMでは、活動状況やヒバクシャ医療についての情報を掲載したパネルやX〔エクス〕投稿記事の展示、小冊子「漫画で学ぶ長崎原爆」、「機関誌」の配布を行いました。NASHIMの事業活動内容や構成団体、カザフスタンへの放射線医療にかかる人材育成の必要性などについてPRすることができました。

《概要》

- 日 時：令和6年9月15日（日）11：00～16：00
- 会 場：長崎県庁1階（長崎市尾上町3-1）
- 主 催：（公財）長崎県国際交流協会、フェスティバル2024盛り上げ隊
- 来場者数：約2,300名
- 出展団体：県内国際協力・交流団体等 33団体



出前講座を開催しました

ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及し、被爆者医療にもっと関心を持っていただくため、長崎大学原爆後障害医療研究所の先生方に小中学校を訪れて講義を行っていただく「出前講座」を実施しています。平和と科学、医療に関する国際協力への興味・関心を促すことの出来る楽しい講座となっています。

今年度は、小学校1校（女の都小学校）、中学校3校（三川中学校、三和中学校、高島中学校）で全4回実施しました。

今回は全て、三根眞理子先生による「原爆直後の救護活動と調査」、「長崎原爆被爆者のこころの調査」をテーマに、アニメーションやクイズを交えながら講義を行い、生徒たちは元気よくクイズに答えながら、原爆のことについて学んでいました。



三川中学校にて（三根先生）



三和中学校にて（三根先生）



高島中学校にて（三根先生）



女の都小学校にて（三根先生）

| 日 時 | 学 校 名 | 講 義 名 | アンケート結果 | | | | | ％ (よくわかった・ まあまあわかった) | 先 生 |
|-------|--------|---------------------------|------------|--------------|-------------|-----|-----|----------------------------|-----|
| | | | よくわ かった | まあまあ わかった | わからな かった | 無選択 | 合 計 | | |
| 6月5日 | 三川中学校 | 長崎原爆の話・ 原爆直後の救護活動と調査 | 33 | 7 | 0 | 0 | 40 | 100.0 | 三 根 |
| 6月24日 | 三和中学校 | 長崎原爆の話・ 長崎原爆被爆者のこころの調査 | 41 | 10 | 0 | 1 | 52 | 98.1 | 三 根 |
| 7月3日 | 高島中学校 | 長崎原爆の話・ 長崎原爆被爆者のこころの調査 | 2 | 0 | 0 | 0 | 2 | 100.0 | 三 根 |
| 7月5日 | 女の都小学校 | 長崎原爆の話・ 長崎原爆被爆者のこころの調査 | 13 | 2 | 0 | 0 | 15 | 100.0 | 三 根 |
| | | 合 計 | 89 | 19 | 0 | 1 | 109 | 99.1 | |

出前講座終了後に実施したアンケートでは、99.1%の生徒さんたちが「よくわかった」または「まあまあわかった」と回答されました。

令和7年度 出前講座

下記の幅広いメニューを小中学生の皆さんにわかりやすく説明いたしますので、興味をお持ちでしたらぜひ事務局までご連絡ください。講座費用は無料です。

| 講座メニュー | | 90分 (短縮可) |
|------------------------------|-----------------|--------------|
| ①【実習】測ってみよう放射線 | | |
| ②こわい？ こわくない？ 放射線のふしぎ | | |
| ③放射線を浴びたらどうなるの？ 体の中をのぞいてみよう！ | | |
| 長崎原爆の話 | ④原爆直後の救護活動と調査 | |
| | ⑤長崎原爆被爆者のこころの調査 | |

- 放射線の基本と単位を簡単に説明した後に、身の回りの放射線を測定し、それらの放射線がどこから来ているのかを考察し、私達が自然放射線の中で生活していることを理解できるようにします。
- 偏見や思い込みに惑わされず、「放射線を正しく怖がる」ようになれることを目標に、放射線の性質や特徴をイラストとQ & A形式のスライドを使って小学生にも分かりやすく説明します。原爆、原発などの社会問題やレントゲン写真など身近な実例を提示して、放射線の「こわい面」と「こわくない面」を対比しながら放射線の真の姿を解説します。
- 放射線が私達の身体に及ぼす影響とその理由について、スライドとクイズによって理解を深めていきます。放射線が様々な方法で計測できることや体内で起きていることを解説していくことで、放射線の影響について正しく理解するとともに、科学的な興味を引き出すことを狙いとしています。
- 原爆投下直後の混乱状況下で生き残った医師たちが行った被災者の救護活動および調査について紹介します。それによって、原爆後の医療活動や調査について理解できるようにします。
- 原爆直後の被爆者のこころの状態を紹介し、現在のこころの状態についての調査結果を紹介します。それにより、被爆者のこころの傷について理解できるようにします。